

# 豊平川の自然を見つめなおす

## 「身近な自然としての豊平川の検討会」

竹 中 万 紀 子

たけなか・まきこ  
豊平川ウォッチャーズ代表  
北海道東海大学非常勤講師

はじめに

豊平川は北海道の中でも急流の部類に入るが、道都札幌の最も都市化した地域を南北に縦貫している。このような地理的、人口分布の条件が、豊平川の治水事業において洪水防止と「効果的で効率の良い」土地利用に強調が置かれてきた大きな要因であった。これは豊平川が持つ野生生物の生息地としての役割や重要性を二の次にする結果となっている。

近年、豊平川の自然環境を見直そうという動きが河川管理者と市民双方で起こってきている。このような河川の自然環境復元活動に携わった河川管理者や市民とも、自然環境の改善のためには協働作業が重要であることについての共通認識を持っている。

そのような協働作業で重要なものは、河川環境を改善するために、例えば植樹や清掃活動などで一緒に汗を流すことである。一緒に汗を流すことと同様に重要なものは、市民の認識を高める方法を模索することであろう。

この報告では、豊平川ウォッチャーズという市民グループの設立後に、豊平川における野生生物の生息地の保全と復元に関して何が改善されたのか、あるいは改善されないままなのかについて当グループが主催する「身近な水辺としての豊平川の検討会」の内容にも触れながら紹介し、論じる。

### 豊平川の河畔林と草地―その後

#### (1) 開発局と河畔林

九五年〜九六年にかけて、震災などの災害時の緊急用施設整備のため、環状北大橋と雁来大橋の下流側の河畔林が相次いで伐採され（写真1）、

環北下流には緊急車両用の取水施設が、雁来下流には緊急用の船着場（物資を運んだ船が横付けできる施設）が造成された。



写真1 伐採された環状北大橋下流の河畔林  
1997年7月

整備にあたっては植生復元のために表土を被せ直すという配慮があり、少しずつ草が生え戻っているが、ペースは遅い。伐採前は、北海道では比較的個体数が少ないオオヨシキリの繁殖地で、十数m〜二、三〇mに一羽ほどの割合でオスがえざる草地やヤナギ低木林が二百mほど続いていた。九八年五月の観察では二オスほどに減っていた。

取水施設は、火災が最も心配される市の中心部から直線距離で三km離れている。震災などで瓦礫の山と化した道を往復六km走って迅速な消火活動はできまい。阪神大震災では、小川の暗渠化や井戸の埋め立てによって、身近な水が失われたことが被害を大きくした原因だった。非常時には遠く

の水は誰も必要ないのである。

船着場（写真2）は、災害時に日本海から物資を積んだ船が川を航行し、荷下ろしをする場所というが、石狩川河口は冬期に結氷する。



写真2 夏だった。1998年夏も増えた。草の増えた場所。船着場も完成した。乗る場所が完成した。車

また、着船のために高水敷を切り下げて川幅を広く深くしたが、これが思わぬ（ある程度予測されていたのだが）結果となった。川幅が広がると流れは緩やかになり、土砂が堆積しやすくなり川底は浅くなって、船は航行できない。そのため、定期的に数百万円をかける浚渫が始まった。長期的な災害への備えとしてこれで良いのだろうか？それを眺めているのは私達の税金である。

これら二つの緊急用施設は除雪しないので積雪期に大災害が起こっても、すぐには利用できない。船着場にいたっては、石狩川河口部の砕氷から始めなければならぬ。そして、頻繁な浚渫が必要な船着場へは、船が座礁せずに一年のうちどれほ

どの期間航行できるのか？

これらの施設整備箇所は、秋にムクドリがねぐらとして利用する林であった。春・夏には草原性の鳥が生息し、渡り鳥の中継地でもあった。両施設合わせて伐採した延長は五百mほどだが、豊平川の貧弱な河畔林の中では豊かな部分であった。また、緊急車両のための「取付け道路」が石狩川河口から真駒内まで造成された。豊平川沿いにはすでに舗装された自転車道路があり、緊急時にはそれを使いまわしたら良からうと思うのだが、お役所はそうはいかないらしい。

取付け道路には、堤内（堤防から見えて人が住んでいる側）からのアクセス路も数カ所設けられた。アクセス路には豊平川では車止があるが、石狩川では無い場所があり農業用、管理用道路から取付け道路に入ることが可能。石狩川河川敷を經由して入った四駆車が、豊平川河川敷の草原を横切り、河畔に乗りついたり、特に下流域では自転車道路を自動車やバイクが疾駆することもある。これも、取付け道路造成前から私達が危惧していたことだ。河川敷の利用者にも危険だし、草原の生物にとつては脅威である。

災害への備えの重要性には誰も異論はないが、本当に役に立つ備えをしなければただの税金の無駄遣いに過ぎない。平常時に緊急施設が環境にどのような負荷を与えるのかも考慮する必要がある。豊平川のこれらの施設のあり方は今後も問われ続けなければならない。

しかしながら、河畔を出来るだけ手付かずのまま保全して欲しいという私達の要望を汲んで、開発局石狩川開発建設部札幌河川事務所は「残された環北の河畔林から上流へ約

一・五kmの区間はなるべくそのまま保全する」という方向に転換した。カワセミの天然の営巣場所やコチドリ、イソシギなどが生息する河原も残ることとなった。しかし、改修計画は中止ではなく、現時点では凍結状態にある。治水のために改修が必要ならば、右岸のコンクリートはずし、水と陸がゆったりと接する本物の水辺を取り戻したいものだ。豊平川本流でコンクリート護岸を取り去る最初の場所がここであって欲しいと願っている（写真3）。

さらに、河畔の高水敷は、札幌市緑化推進部が開発局や北海道の占用許可を受けて公園を造成している部分が多い。石狩川との合流点から南区藤野までの約三十五kmの区間で両岸合わせて約二十km以上にわたって、運動施設や芝生公園、パークゴルフ場などが広がる。公園がない場所は高水敷の面積が狭くて公園にできない場所や治水上占用を許していない場所である。これらの高水敷の公園施設と川との間にはコンクリートの低水路護岸が施されており、自然環境としては非常に貧弱である（写真4）。



写真3 コのけの水つ前治を？手うらろ林護らだ畔トちな河一どななりきかクめベ豊ンたる

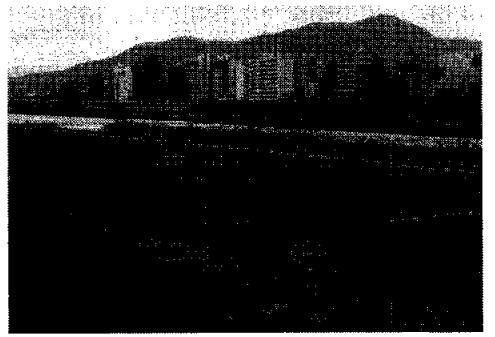


写真4 豊平川の河川敷。いわゆる「水辺」の向こうの河畔は少なく、フェンスが定期的に間引かれている。

豊平川は道内でも有数の急流河川で、昔は現在の三倍以上の川幅で札幌の扇状地を奔放に流れていた。現在、川は手なづけられ狭い築堤の間を窮屈そうに流れる。その分、有効で効率的な土地利用が可能になったのだが、川は生き物。どんなに押さえつけても低水路護岸と水との接点には植生が発達し始める。豊平川では細く長くヤナギ林が連なるが、水の流れを阻害したり、せり上げたりする治水上厄介な代物。そこで、豊水大橋と藻岩橋の間では概ね三年に一度伐採か間引きされている。

河川事務所では、以前はヤナギを皆伐していたが、九七年には全木調査した上で、間引く方法をとり、九八年度からは一本の株立ちを残して周辺を間引くという方法を採用している。以前は樹種に関係無く間引いていたが、外来種を除去し、在来種を残すように間引き方法も変わってきた。ま

た、市民向けの河畔林間引きの説明会を開くなど、市民の支持と理解を得るための行政の取り組みも始まった。

九八年九月には河川事務所の呼びかけで環状北大橋上流の堤内側の土手で植樹作業が実現し、百名近い参加があった。

また、今年度からホロヒラみどり会議がスタート。幌平橋の左岸の堤防補強工事で出現する空間にどんな緑を作るかを行政と市民が相談する場として、今後の成り行きが注目される。

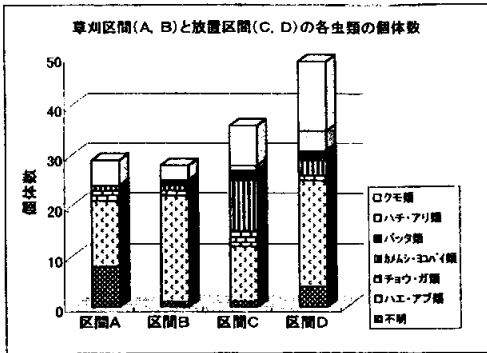
(2) 札幌市の公園行政と河畔植生

九六年〜九八年にかけて、環状北大橋から雁来大橋の間の左岸にパークゴルフ場（以下、P.G.場）、遊具公園などの大規模な公園造成が行われた。造成前は広大な草原が広がり、オオジシギなど草原性の鳥の繁殖地であったが、九七年の環状北〜豊水大橋の造成ではほとんどが失われた。

それに連なる豊水大橋と雁来大橋の公園造成では、ウォッチャーズとして野生生物の生息地を保全するよう市に要望、陳情した。公園行政と協議の結果、芝生

となる予定の区画の一部を柵で囲み野鳥の生息地として残してもらえないことになった。もともとの草原とは比べようもないが、生き物の渡り廊下と草原性生物の生息地としての緑がなくなった。公園と野生の共存の一步として評価したい。

また、五十×二百mにも満たない狭いところではあるが、九七年から環状北大橋上流の既造成の芝生公園の一部で草刈をしない部分を設定してもらっている。虫などの調査をしたが、一年目にして生息する虫の量に差が出たり(図1)、ノビタキなどもやってくるようになった。子供達も草原遊びの場として楽しめる空間となった(写真5)。



草刈区間(A+B)と放置区間(C+D)のサイズ別クモ類個体数

バッタ属の大きさ別平均個体数

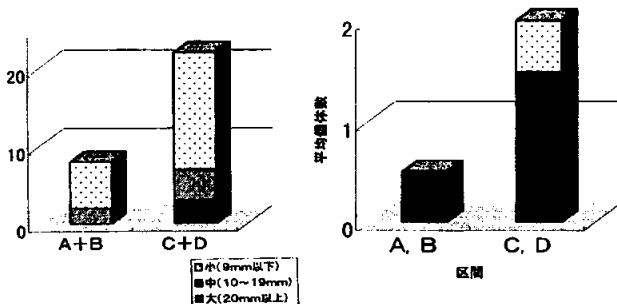


図1 草を刈る場所と刈らない場所では虫の出現種にたった1年で大きな差が出た。



写真5 草刈をしめない公園空間で草っぱら遊びを楽しむ。

九九年度にスタートした「新緑の基本計画」で初めて「川によってみどりをつなぐ」ことが謳われ（策定の前段階のみどり会議で委員として会員の日さんが頑張ってくれた結果である）、はじめ豊平川やその支流の河畔林などに「みどりのつなぎ手」としての役割が認知された。この「みどり」の定義の曖昧さは問題として残るが、基本方針に川の緑が盛り込まれたことは大きな変革であった。

近年のパークゴルフ熱と豊平川の河畔は当然無縁ではなく、すでに六カ所のP.G場が造成されている。優先順位としては、河畔の生き物の生息地を復元する方が先であろうが、公園行政は基本的に自然に配慮する必要はない。河川管理者が河畔の自然に配慮する取り組みを展開していても、その高水敷の公園は言わば「治外法権」なのである。今年度造成した二つのP.G場を最後に河畔には

これ以上作らないという市の方針ではあるが、もっと欲しいという要望は強い。造園課との協議の結果、妥協案としてこれら二つのP.G場のグリーン以外の草地を粗放草地としてもらうことになった。これも小さな前進であろう。

P.G場の最大の問題は、その空間がパークゴルフをする人だけのものになっているという不公平性である。ただの広場や芝生であれば犬の散歩や散策、ボール投げ、サッカーと同じ場所を使いまわすことが可能だが、P.G場を使いまわしがきかない。その上、通常の芝生は年に一、二回の草刈ですむが、P.G場はシーズン中はほぼ月に一度の草刈が必要だし、痛めば張り替える。非常にコストがかかるという意味でも公平ではない。

#### 札幌市民にとって豊平川はどんな存在？

公園行政の責任ではないのだが、P.G場利用者のマナーの悪さは問題。設置されたトイレがあるのに、河畔で用を足す人が目立つ。その下流に子供達の親水空間があり、釣り人がおり、サケの産卵床がある。

マナーが悪いのはP.G愛好者だけではない。全員ではないが、釣りやラジコン等を楽しむ人々も「河畔はトイレ」と考えているのではないかと思うほどだ。オイルやテグスも置き去りにする。老いも若きも、吸殻を投げ捨てて去って行く。スポーツを楽しむ人は、練習さえできればよいので川には関心がない。山の中だろうと、街中や河畔だろうと、関係がないのだ。

このように河川空間利用者の多くは、豊平川の景観や自然、抱えている問題には、無関心。川に

来るけれど川を見ていない。

札幌市民にとって豊平川は自分達の欲望やニーズを満たすための道具に過ぎないとも言えなくも無い。飲み水の九八%を供給している豊平川が自分達の命の源であるという実感や市街地の中で緑をつなぐ重要な回廊でなければならぬという認識は乏しい。

#### 「身近な水辺としての豊平川の検討会」のスタート

九八年六月に新任の河川事務所長と環状北大橋の河畔林でお話する機会があった。氏は治水や川の自然の重要性、そして保全のために官民がいっしょに行動していく必要があることについて市民の理解を得たいが、一八〇万都市で誰にどうやって情報を発信したら良いのか悩むということをお話されていた。

また、市民の身近な水辺に対する関心の薄さについて、豊平川ウォッチャーズのメンバー同様、行政も危惧や無力感を持っていることも行政の方々とお話しするなかでわかってきた。

ウォッチャーズの中でも川についてもっと知りたいという意見もあり、身近な自然としての豊平川を多くの人に知ってもらうことも重要な活動の一つなので、「身近な水辺としての豊平川の検討会」の開催に取り組むこととなった。夏と冬の年二回の開催で、来年二月には早いもので五回目となる（図2）。

第一回目は九八年二月に開催され、豊平川の治水とゴミ問題、サケの稚魚放流事業などについて河川事務所といくつかの市民グループが活動報告を行った。百名近い参加があったのだが、「治水の現場から、詳しい説明を聞いたのは初めてだっ



図2 「身近な水辺としての豊平川の検討会」 ニュース「ハビタット」。

た。目からウロコだった」「清掃活動やゴミ問題の大変さが良くわかった」など反響が大きく、市民と行政の意思疎通の大切さを再認識する検討会となった。

第二回目は札幌市の公園行政から「新緑の基本計画」について説明があり、北海道札幌土現からは精進川の多自然型川づくりについて、河川事務所からは新河川法になってからの治水、環境保全の取り組みについてご紹介頂いた。

第三回目のテーマは「都市と雪と川の自然」だったのだが、北大で水質や雪に含まれる汚染物質などを調査された橋先生の除排雪汚染やゴミについて、札幌市道路維持部雪対策課から札幌の除雪事

そうという意見が多数を占めたので、二〇〇〇年二月の検討会では別の切り口で雪と川について考える予定である。

そして、九九年八月二十二日に開かれた第四回目では「都市景観と川の自然」がテーマ。三木昇さんに樹木から見た豊平川の景観について、そして北大の浅川先生には人が好ましいと思う豊平川の景観についてご紹介を頂いた。三木さんの「豊平川には大木がない。もっと大木が生える余地がある」とよいのだが、「と言うご意見にはうなずく人も多かった。なぜ大木がないのか？それは川を狭めすぎたからにはかならない。

検討会ではとかく遠い存在である研究者や行政

情について、サケ科学館の研究員から豊平川の魚と雪について、そして開発土木研究所の環境研究室から札幌の降雪についてお話し頂いた。参加者は札幌の除雪の大変さ、川の自然への負荷について新知見を得られ有意義だったが、どうしたら雪と川の自然を両立できるかについては時間切れで話しつくせなかった。もう一度雪について話

の方々のお話を直接聞いたり、意見交換ができるので、市民にとって良い刺激となっている。逆に行政も市民の生の声を聞く好機であろう。このような交流を通して市民が親しくなり一緒に川の自然を考えていく足がかりとなれば幸いである。

河川空間を利用して幅広層からの参加も望みたいが、関心がない人々はまず参加しない。身近な自然を残すためには、利用者である市民の協力と理解も必要。検討会でもっと「面白く刺激的」なテーマに取り組むのが良いのかもしれない。今後も試行錯誤を繰り返して、豊平川の身近な自然を多くの人々に伝え、市民みんなで保護復元する途を探りたい。

